# 暁 鐘 の 音　NO.24

（かねのね）

秋田大学教職大学院 2022.4.14

## 第13回あきたの教師力高度化フォーラムを終えて

学校マネジメントコース
現職院生１年次　　江幡　隆弘

第13回あきたの教師力高度化フォーラムにおいて研究成果の発表を終えた今、大学院の学びも結びに向かおうとしていることを実感している。

収束しないコロナ禍のため、研究成果発表会、講演、シンポジウムのすべてがズームによる開催となった。何度も変更を余儀なくされたが、そのたびに臨機応変に対応し、成功に導いた各部門の責任者のリーダーシップ、ストマス２年生を中心とした運営スキルとチームワークはすばらしかった。ズームを用いて実施したこの経験は、私にとっても今後の糧となる貴重なものとなった。

荒瀬克己氏による講演とその後に行われたシンポジウムは、まさに「静」と「動」と形容するのがふさわしいものだったと思う。

荒瀬氏は、講演のなかで、探究の必要性や自己肯定感を育むことの重要性、授業のなかで生徒を主語に変えるために、問いかけ、考え、活用する時間を保証することの大切さについて示された。静かな語り口であったが、言葉にはご自身の教師、校長の教育実践を通して確立された信念が感じられた。最後におっしゃった「対話の生まれるやわらかな学校を作っていってほしい」というメッセージが心に残っている。現場に戻り、教室や職員室が対話による学びが生まれる場となるように力を尽くそうと思う。

続くシンポジウムは、「『令和の日本型の教育』の構築を目指して（答申）」の「個別最適な学び」と「協働的な学び」の関係のわかりにくさについて、非常に活発でスリリングな討議が行われた。ねらいどおり、答申のわかりにくさを克服することができたシンポジウムになったのではないかと感じた。阿部先生の「『協働的な学び』に、『個別最適な学び』が構造的に組み込まれることで、『誰一人取り残すことのない』教育・授業が実現できる可能性がある」というご指摘を授業で実践できるように研究に努めていきたい。

最後に、これまでご指導いただいた先生方、教職大学院でともに学んだ現職、ストマスの皆さんに感謝申し上げます。おかげさまで無事に発表を終えることができました。有難うございました。

## シンポジウムに参加して

学校マネジメントコース
現職院生１年次　　吉川　寿朗

第 13 回あきたの教師力高度化フォーラムでは、「個別最適な学びと協働的な学びとの一体的な充実を図る」というテーマのもと、荒瀬克己氏（教職員支援機構理事長）、石川政昭氏（県教育次長）、新地辰朗氏（宮崎大学副学長）、阿部昇氏（秋田大学教職大学院特別教授）の４名によるシンポジウムが行われた。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の関係をどう捉えたらよいか、何度「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）」を読んでも分からないという阿部氏の発言をきっかけに、活発な意見交換が行われ、Zoom での参加ではあったが、臨場感あふれる熱い討議を目の当たりにし、日本の教育の最新の動向に触れられていることを実感した。同時に、一つ思い起こしたことがあった。それは、秋田大学教育文化学部附属中学校の訪問である。同校は、「未来を自立的に生きる～出会い・発見・喜びのある学びを通して～」という研究主題を設定し、「未来を自立的に生きる」ためには、「主体的な行動力」「批判的な思考力」「多角的な省察力」が必要だとしている。そして、「批判的な思考力」とは、「矛盾、相容れないような考えや立場にあったとしても、互いのつながりや関連性を考慮しながら、新しい仕組みや価値を生み出していく力である」という話を伺った。

今回のシンポジウムでは、正にこの「批判的な思考力」が最大限発揮され、「笑顔で関わり、批判的に熟慮する」姿を見ることができたのではないかと思った。４名の方々を中学生の姿にオーバーラップさせることは失礼極まりないことではあるが、同校が育成をめざす「筋道を立てて考え伝え合う表現力」、「他者を受容できる寛容さと柔軟性」、「多面的・多角的に問い直す探究心」がシンポジウムの中で体現されていたのではないかと思う。想像の域を超えなかったものが映像化されたようにも感じ、胸にストンと落ちるものがあった。

最後に、これまでご指導いただいた教職大学院の先生方、現職院生の皆さん、ストマスの皆さんに感謝申し上げます。無事に成果発表を終えることができました。一年間様々な場面で支えていただき、本当にありがとうございました。

## 『講演「令和の日本型学校教育」の推進』を通じて

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生２年次　　相馬　舜平

「幸せになるために勉強するんだ」

高校入学後のオリエンテーションで当時の校長先生が私達新入生に向けた言葉である。この言葉はその時の自分の勉強に対するモチベーションとなっていた。中学３年から教員になりたいと思っていた自分はこの言葉を耳にし、勉強に対する見方、学びに関する考え方が大きく変化したことをよく覚えている。この言葉があったからこそ授業で積極的に発言することができるようになり、質問したりするようにもなった。この姿勢は今でも貫いている、そしてこれからも貫き通すつもりだ。

前置きは長くなったが、講演の荒瀬先生の最初のスライドに「幸福に生きるために学ぶ」と記されていたため当時のことを思い出した。学ぶということはどういうことか、さらに学びや学び方を問うということに関して考えさせられた時間であった。子

どもたち自身が興味をもつようになる、自分で考えるようになる。こういった状態になるにはどう教師が子どもたちを揺さぶるのか。主体的・対話的で深い学びの授業改善、環境づくりなどもっと深く考えていかなければならないと感じた。

授業改善に関しては、様々な気づきを与えることの荒木先生は重要性を述べていた。私の専門教科の外国語では言語に対する気付き、文化に対する気付きなどを与えることで子どもたちが知的好奇心を抱き疑問を形成することにつながると考える。気づきを与えるためにその教科の知見を、よりこれからもアップデートしていかなければいけないと感じた。環境に関しては居場所づくりがカギとなると考える。居場所をつくってあげることで発表したいという子どもたちの好奇心や主体性につながる。そのために校内体制や教室環境の工夫、地域との連携にも努めるべきだと感じた。

これらのほかにも教職員間の信頼関係づくり、評価の在り方などに関しても様々なご意見をいただいた。どのお話も新年度から学校現場に立つ新米教師としてとても貴重であり、ためになるものばかりであった。講演を通じて、より「学びに対する探求心」が自分の中で高まった。学生生活が終了する３月末まで自分のスキルを向上させるために努力したい。また、その後の教員人生においても学ぶ意欲を心にとめながら日々過ごしていきたい。

## 誰一人取り残すことのない姿勢

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生２年次　　新山　壮一朗

この度のシンポジウムのテーマは、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る」ということで、個人的にとても興味深い内容でした。私は「個別最適な学び」と「協働的な学び」のそれぞれについては、しっかりと理解し、イメージを掴んでいるつもりでした。しかし、それらを一体的に充実するということに関しては、あまりイメージを掴めていませんでした。しかし、シンポジストの先生方のお話や提案・協議を通して、理解が深まり、それを実践することへの不安も解消されました。そのため、４月からは現場において、子どもたちをよく観察し、様々な工夫を施しながら、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に取り組んでいきたいと思います。そうすることによって、私自身も大切にしていきたいと考えていた「誰一人取り残すことのない姿勢」を重視した授業を実現していきたいと考えています。

また、ICT に関して、私は積極的に活用していきたいと考えています。しかし、そのためには必要感に応じて活用することが重要であり、その見極めをしっかりとしないと逆に負担になってしまう場合もあると思うので、その点は注意したいと思います。さらに、ICT の活用などのように、教育現場ではこれからも新しい試みが次々と行われていくと思うので、教師は学び続ける職業であるということを肝に銘じて、子どもたちのためにも、常に学ぶ姿勢を忘れず、新しいことを吸収していきたいと思います。

この度のシンポジウムでは、たくさんのことを学ばせていただきました。シンポジストとして、貴重なお話をしてくださった阿部先生、新地先生、石川先生、荒瀬先生に感謝の言葉を送りたいと思います。本当にありがとうございました。また、現場で実践していく中で、新たに疑問や分からない点が出てくると思うので、そのときはぜひご相談させてください。よろしくお願いします。

## 成果発表を終えて

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生２年次　　清水里沙

学生生活６年間が終わりを迎える。学部４年間では「古典教育の指導方法」について、院２年間では「説明的文章を通した批判的読み」について、それぞれ研究を進めてきた。どちらも国語教育が抱える課題解決に焦点を当てたものだったが、「子どもが学びに慣れ親しむ」ことも共通していたのだと、振り返ってみて感じる。教師目線だけでなく、子ども目線でも国語科について考えることのできたこの６年間は、非常に有意義なものであった。

これまでの研究は決して順調ではなかったが、2月18日に行われた成果発表では自信を持って自分の研究を発表することができたように思う。そう感じることができたのは、これまで研究してきた日々やインターンシップ実習があったからである。わたしの専攻していた国語科では、毎週水曜日に指導教員とのゼミを行うことで、自分の研究を常に見直す機会ができていた。なかなか思うように進まず悩むことも多かったのだが、主担当であった阿部昇先生の丁寧かつ的確な指導により、方向性や具体性を掴むこともできた。

また、インターンシップ実習では、とくに２年次の実習で研究を大きく進めることができたと思っている。学校規模が小さく、生徒数も少なかったため、はじめは不安を覚えていた。加えて「批判的読み」を学ぶ機会がほとんどなかったので、それについても苦戦していた。

しかし、そこで大切であると感じたのは、先述した「子どもが学びに慣れ親しむ」ことである。この視点をもとに研究を進められたことが、今回の鍵であったと思っている。

成果発表で新たに指摘や助言されたこともある。今回の発表でわたし自身の学びを終えるのではなく、今後の糧として現場でも活かしていきたい。

## センター連携発表を通して

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生１年次　　阿部　倫己

大学生として４年、大学院生として２年の計６年間の学生生活にピリオドを打つ時が来た。沢山の人々に出会い、支えられながら過ごしてきた学生生活であったが、院生としての２年間は自分の人生で初めて「主体的に学ぶ」ことを徐々に実践できた年であった。

大学院１年目は、自分がどんな研究をしたいのか、どんなことを実践したいのかが不明確であった。正直、研究は無事に修了するためのツールぐらいにしか考えていなかったのである。

しかし、ある事をきっかけに研究について前向きになることができた。それは、２年目のインターンシップで出会った生徒たちと教師の存在である。元気で明るくとても素直な生徒たち、何事にも全力で生徒を第一に考えている情熱のある教師と出会ったおかげで、この生徒たちのために何かできることをしたい、この教師のように熱く全力になれる人になりたいという気持ちになることができた。

インターンシップを終えてからも、研究のテーマである「一般化」と生徒たちをどう結び付けたらいいのかと考え苦悩する日々が続いた。担当の先生方とは何度も成果発表に向けた検討を重ね、多く

の議論を行った。そして訪れた、成果発表本番では、実際の生徒の姿から「一般化」の様子に加え、私の教育の根底にあった「数楽」を関連させて発表を終えることができた。

今回の成果発表を通して、私の「一般化」に関する研究は、現場でも使えそうということが明らかになってきた。これは「一般化」という理論を実際の生徒の姿に重ね、検証を通して得られた成果である。大学院を修了すれば研究は終わりということではなく、日々の授業に研究の成果を反映し、実践し、試行錯誤を繰り返していくことが重要なことなのだ。そのためにも、私は「学び続ける教師」であると共に、大学院で培った理論と実践の往還を大切にして、今後の教職人生を謳歌していきたい。

# 退職される先生方からのメッセージ

## 22年間、お世話になりました。

教職実践専攻（教職大学院）
特別教授　　阿部　昇

秋田大学に赴任したのがちょうど2000年です。それから教育文化学部に16年、大学院教育学研究科（教職大学院）に6年、在籍しました。

真摯で前向きの研究姿勢の院生・学部生のみなさんと出会えたことが、最大の収穫です。大学院・学部の先生方との出会いも得がたいものでした。そして、秋田県教育委員会、秋田県内の市町村教育委員会、また小中高の先生方との共同研究も有り難いものでした。特に秋田県検証改善委員会委員長を12年間、つとめさせていただいたこと、強く思い出に残っています。研究上のヒントを山ほどいただきました。

この22年間、私が特に大切にしてきたことを一つだけお話しします。それは短く言うと「常に一歩前に出る」ということです。手を挙げようか挙げないでいようかと迷ったときは、必ず手を挙げてきました。引き受けようか断ろうかと迷ったときも、必ず引き受けてきました。「どなたかお願いできませんか」というときも手を挙げました。

「一歩前に出る」ということは、実は言うほど簡単ではありません。ドキドキします。この忙しい中でなぜわざわざ引き受けるんだという自分も私の中にいます。後でたいへんな思いをしたことも一度や二度ではありません。

しかし、それでも「一歩前に出る」という姿勢を貫いたことは、よかったと強く感じています。それが私を曲がりなりにも成長させてくれました。新しい方々との出会いも生まれました。

みなさんにも可能な限りその姿勢をもってほしいなと思っています。

４月からは、東京と秋田の二拠点生活になります。やや東京に滞在する時間の方が多くなるかもしれませんが、これからも秋田で仕事をさせていただきます。今後もよろしくお願いいたします。

写真 1　　阿部　昇　特別教授

写真 2　　林　信太郎　教授

## 今できることを

教職実践専攻（教職大学院）
教授　　林　信太郎

教職大学院には創立された最初から関わってきた林信太郎です。退任にあたりまして、院生の皆様にご挨拶申し上げたいと思います。「忙しい時ほど仕事ができる」というお話をさせていただきます。

かつて、附属小学校の校長と大学教授の仕事を掛け持ちしていた時は、おどろくほど忙しく過ごしていました。でも、不思議なことに、この間本も一冊出していますし、論文も生産していました。忙しい時にはそれなりに工夫しますので、生産力もあがってくるのですね。

大学院を修了すると、たいへん忙しい教員生活が待っています。タイムマネジメントが大変重要です。そこで一言「今できることを明日に回すな」。仕事はたまると重圧になります。さっさと片付けて次の仕事に向かいましょう。

## 退任にあたって「ほ～ら」

教職実践専攻（教職大学院）
特別教授　　林崎　勝

教職生活をまもなく終えるに当たり、思い出している歌詞が右の「未来へ」です。節目節目で、この一節を歌っていました。自分自身を励まし、また勝手にこの歌で仲間たちを励ましていると勘違いしながら歌ってきました。

「未来へ」　kiroro
ほら　足元を見てごらん
これが　あなたの歩む道
ほら　前を見てごらん
あれが　あなたの未来

縁あって皆さんと教職大学院という空間で同じ時間を過ごした者として、もし私の言動が皆さんの中に少しでも活かされるのであればうれしく思います。皆さんの言動は私の中に残っています。

終わりに、この歌は「未来に向かって ゆっくり歩いて行こう」と結ばれています。どうか皆さん！よりよい未来を創ってください（私も）。

大変お世話になりました。さようならお元気で。

写真 3　　林崎　勝　特別教授

写真 4　　小松　睦子　特別教授

## これから

教職実践専攻（教職大学院）
特別教授　　小松　睦子

喜怒哀楽の感情が、年々強くなっていることを痛感している私です。ささやかな出来事でもうれしい知らせには、生きていることの幸福感で一杯になります。

しかし、最近の私は押さえようのない悲しみや怒りの感情に押しつぶされそうです。他国への侵略や支配を正当化する自国第一主義国の拡大。国内では、実の親が幼い我が子を死に至らしめる非情な虐待事件や、聖域だと思っていた祖父母と孫間の殺人事件までが頻発……

「この悲しい現状を教育の力で改善しなければ！」と一人意気込むのですが、今の私に何ができるのかと思案ばかり。幼児教育から大学院までの全ての教育が、地球市民として自他の幸福を願い、豊かな想像力とたくましい行動力をもつ人間の育成につながるようにと願ってやみません。教職大学院の先生方、院生のみなさん、これからも頑張ってください。私も地球市民の一人として、自分が成すべきことを考え行動していきます。

１年間お世話になりました。ありがとうございました！

## 離任にあたって

教職実践専攻長（教職大学院）
教授　　原　義彦

令和４年３月末をもって秋田大学を退職することになりました。秋田大学には 18 年間在職しました。このうち、最後の６年間は、教職大学院の発足から大学院とともにした期間でした。時間だけは過ぎたものの、私が教職大学院に果たせたことを探せども何も思い当たらず、今更ながら、愕然とし、反省しています。

一方、理論と実践の往還をコンセプトとした大学院の研究発表や協議では、唸り、納得し、研究の深さと面白さを感じる場面が数多くありました。特に研究の視点や方法は、私自身の研究のヒントにもなりました。分野を超えて共有できる研究の

視点と方法に接する機会をいただいことに、心より感謝申し上げます。

最後になりますが、修了生、院生、教職員の皆様のますますのご活躍と、教職大学院の一層の充実発展をお祈りし、離任の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

写真 5　　原　義彦　教授

写真 6　　小池　孝範　准教授

## 教職大学院との６年間を振り返って

教職実践専攻（教職大学院）
准教授　　小池　孝範

教職大学院には、スタートした 2016 年４月から授業担当と副指導教員としてかかわらせていただきました。「理論と実践の往還」を標榜している教職大学院ではありますが、私自身は高校での講師経験はあるものの、理論を中心とした研究であったため、実践の部分については不安を抱いてのスタートでもありました。

しかし、team teaching の授業運営の中で実務家教員に実践的な面からの指導をいただき、また、現職院生の現実に基づいた問題意識や問題設定、学部卒院生のよりよい教育を目指す真摯な姿勢と瑞々しい感性がうまくかみ合い、「理論と実践」の往還が実現できていたように感じております。同時に、その中で私自身も改めて教育を見つめなおすことができましたし、「多面的・多角的」にとらえる視点も得られたように思います。

３月いっぱいで秋田大学を離れましたが、秋田大学大学院にかかわらせていただいたこと、そして、ともに考え、議論したことをもとに、今後の教育、研究にあたっていきたいと思います。

最後になりますが、６年間、どうもありがとうございました。

# 修了生からのメッセージ

## ～現職院生～

**小熊　大樹**

社会科教師になって十数年、面白く分かりやすい授業をするために努力してきました。しかし、いくら教材研究を重ねても、「面白いね。それで？」「分かりやすいね。それで？」と誰かに言われている気がしていました。この「それで？」に対する答え、つまり社会科教育の目的が、教職大学院で見えたと思います。そんな基本的なことを、今さらですが。これまで支えてくれた皆様に心から感謝します。有難うございました。

**江幡　隆弘**

１年間の「入院」生活は想像以上の忙しさだったが、充実していた。対面授業、ZOOM、実習、提出課題、実践研究報告書、院生室での現職の先生方やストマスの皆さんとの会話、つながりの大切さ…きっと、今後の教員生活で、大学院で学んだ日々の重さを実感するのだろう。理論と実践の往還。身につけたことを現場で活かしながら、教員として学び続けたい。ご指導いただいた先生方、ともに学んだ皆さんに感謝申し上げます。有難うございました。

**吉川　寿朗**

丁寧に指導してくださった教職大学院の先生方。エネルギーに満ち溢れたストマスの皆さん。ON と OFF を見事に切り替える現職院生の先生方。30 年ぶりの学生生活は、たくさんの方々に支えられ、どうにか修了の日を迎えることができました。夏と冬の五輪を続けて応援することができ、令和３年度は特別な年になりました。皆さん本当にありがとうございました。コロナが収束し、再会できる日が訪れることを心待ちにしています。

**工藤　智史**

教職大学院での一番の学びは、理論と実践の往還を通して、学ぶことの楽しさを学べたことです。実践研究では、専門分野を深く掘り下げ、子どもたちの成長と教師の育ちを支えることの大切さを実感することができました。教職大学院の現職の方や学部卒の方と自分の専門分野だけではなく、大きなくくりの中で教育を語り合えたことは、私の教育に関する価値観を広げてくれたと思います。様々な学びと人との出会いに感謝の１年でした。

**近野　勇雄**

学校現場にいるだけでは分からなかっただろうなと思うことがたくさんありました。研究者教員や実務家教員による専門的で具体的な講義、他校種・他地域の現職教員院生や若さあふれる学部卒院生との学びを通して、学校や教育について客観的、俯瞰的に捉え、考えることができました。今後につなげていきます。ありがとうございました。

**近野　祥子**

この１年間は、これまでの教員生活とは異なる時間と空間の中で自分自身を見つめ直し、この先の教員生活について深く考えた貴重な１年となりました。他校種の先生方や若い院生の皆さんと接する中で、ものの見方や価値観が変わったように思います。そして何よりも経験豊かで高い専門性を有する大学の先生たちから学ぶことは多く、この環境に身を置くことができたことに心から感謝しています。ここで学んだことを支えに、現場で日々精進して参ります。１年間ありがとうございました。

**佐藤　茂樹**

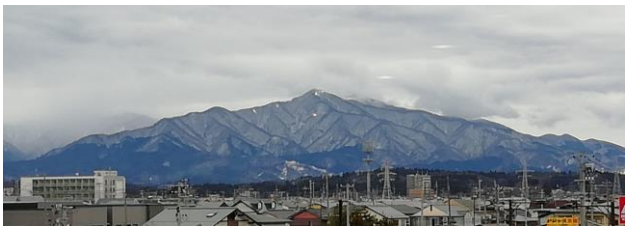
当初は学校現場を１年間離れることに、不安もありました。しかし、一歩離れたところから俯瞰的に学校現場を見つめ直すことができたことは、これまでに経験したことがないすばらしい学びとなりました。身に付けたことを、この後の職務に生かしていきます。これまでご指導いただきました教授の先生方をはじめとするスタッフのみなさん、そして同期の現職院生・ストマスのみなさん、本当にありがとうございました。

**櫻庭　泰則**

この１年間は、専門的な教育理論を学びながら、ICT を活用した新しい講義スタイルも体験でき、知的興奮に満ちた日々でした。教え導いてくださった先生たちの心に残る名言や、校種の違う現職院生のみなさんとの語らい、やる気あふれるストマスのみなさんと共に学んだ経験は、どれも大切な思い出です。今後は、現場に新しい知見を還元できるように頑張りたいです。これまでどうもありがとうございました。

**正木　節**

大学院での「入院生活」は、自らの教職キャリアを捉え直すという点で、かけがえのない時間となりました。今後は教職という素晴らしい職業をマネジメントの立場で大いに楽しんでいきたいと思います。ご指導いただいた教授の先生方、共に学んだ現職院生、ストマスの皆さん、ありがとうございました。



## ～学部卒院生～

**本田　和也**

私は３年間教職大学院に所属しました。教職チャレンジ制度を活用して小学校の免許を取得するためです。そのため、この３年間で他の院生よりも多くの仲間と出会うことができました。時にはお酒の場で大いに盛り上がり、時には教材研究を通して教師力を高めあえる仲間たちです。そんな仲間に出会えたことをとても感謝しています。これまでの繋がりとこれからの新たな出会いを大切に、教職現場で頑張りたいと思います。

**伊藤　真里奈**

２年間における研究の１番の成果は、子どもたちと共に成長することの楽しさや喜びを共有できたことです。また、教職大学院は発表の場が多く、緊張してお腹が痛くなることが悩みでしたが、回数を重ねお腹も精神も強くなったように思っております。教職人生の第一楽章のテーマは「学校で１番明るく元気な挨拶」をすることです。皆様２年間ありがとうございました。

**大関　隆貴**

先の見えない世の中ですが、自分を持って社会に貢献していきたいです。

**小野　彰斗**

大学からの６年間は、前半はダンスに後半は教育と研究に向き合ってきた日々でした。結局は人。結局は自分。と自分のできることやしたいことに向き合えた時間だったと思います。４月からも自分と人と世界に向き合ってできること、したいことをしていこうと思います。素晴らしい人達と関わることができたことに感謝します。ありがとうございました。

**工藤　唯花**

かつて、高校を卒業した当時の私は、幼稚園教諭を目指していました。今後の進路として小学校教員は考えておらず、大学院への進学も全く想像していませんでした。しかし、さまざまな人との出会いや、多くの出来事がきっかけとなって、春からは小学校教員として働き始めます。特に、大学院での２年間は私を大きく変える出会いが沢山ありました。かつての私が想像していたものとは全く異なる道筋を辿ってきましたが、自身の「核」を形成する６年間であったと思います。これからも、新しい出会いを楽しく受け止めて、成長していきます。本当にお世話になりました。

**佐藤　大星**

大学院で学んだ２年間はとても有意義だったと実感しています。コロナウイルスの影響でなかなか思うような活動はできませんでしたが、現職の先生方や私と同じカリキュラム・授業開発コースの仲間と協力し合うことで、大学院でしか学べない多くのことを学ぶことができたと思います。これらのことを生かして秋田県の子どもたちのために精一杯頑張ります。

**清水　理沙**

２年間ありがとうございました。わたしが日々大切にしてきた「温故知新」を胸に、院での２年間の学びを充実させることができたように思います。三度目の正直で教採に合格でき、来年度からは現場に立つこともできます。楽しみと不安でいっぱいですが、これまで学んできたことをもとに頑張りたいと思います。

**庄司　航**

大学院の先生方、院生の皆様２年間本当にありがとうございました。大学院の授業や実習を通して、子どもたちに指導することの難しさや見守っていきたい成長像といったものが明確になった２年間だと思っています。４月からは、宮城県で小学校教員として働きます。秋田で学んだことを活かして、のびのびとした子どもたちを育てられるように頑張ります。本当にありがとうございました。

**相馬　舜平**

コロナの感染により入学当初は特に自分の思い通りにいかないことが多々あったというのが正直な気持ち。しかしながらそんなつらく苦しい中でも今までの学生生活よりいい経験や知見をここで得ることができたと実感している。この２年間はより学校現場や教育全体を深く考えた時間だった。４月から私のキャリアがスタートする。ここでいっぱい学んだ、経験した、だから満足！ではなく気持ちを切らさず前を向いて常に行動していきたい。

最後に、辛いことや理不尽なこともこれから先多く出会うだろう。しかし今まで出会ってきた人たち、支えてくれた家族、友人、先輩、後輩、仲間たちに感謝しながら教員としての道を歩んでいく。この２年間が自分にとって良かったと後に思えるように。ではHope to see you again!

**髙橋　海渡**

現場に出る前に教員としてのスキルを向上させたいと考え教職大学院を志しましたが、学べば学ぶほど自分に足りないものが見えてきました。正直、４月からの教員生活、不安しかありません。ですが少しその不安を楽しんでいる自分がいるような気がします。「教育」という分野は明確な正解が出ないからこそ、不安という気持ちが消えないし、だからこそ面白いということを再認識できた２年間でした。

**新山　壮一朗**

私は教職大学院での２年間を通して、教員としての知識や技術を磨き、大きく成長することができたと感じています。これほど充実した２年間を過ごすことができたのは、たくさんのことを教えてくださった先生方や共に学んできた仲間たちのおかげです。本当にありがとうございました。今後はこれまで学んだことを生かして、秋田県の子どもたちの確かな成長のために尽力していきたいと思います。

**三保　翔**

教職大学院での二年間では教員としての心構えや技を学ぶことができ、大変貴重な経験になりました。二年生でのインターンシップは正直大変ですが、学部の四年間では経験することができなかったより教員に近い立場での学校現場を経験できるため積極的に学ぶ姿勢を大事に、多くのことを吸収してほしいと思います。採用試験や様々な課題がある中、支えてくれた院生のみんな、現場について詳細なアドバイスをくれる現職の先生方、卒業まで導いてくれた大学院の先生方にも感謝申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

**写真 7　　卒業生と在学生の集合写真**

## ４月の行事予定

| | | | |
|---|---|---|---|
| ２０２２年 | ４月 | １日（金） | 現職教員ガイダンス |
| | ４月 | ４日（月） | 在学生プレガイダンス |
| | ４月 | ５日（火） | 入学式 |
| | ４月 | ６日（水） | 新入生ガイダンス |
| | ４月 | ７日（水） | 授業開始 |
| | ４月 | 12 日（火） | 実習ガイダンス・研究倫理研修 |
| | ４月 | 19 日（火） | 附属学校実習ガイダンス |
| | ４月 | 26 日（火） | 「今年度の研究計画及び実習計画」の発表会 |